

動詞「きれる」の意味分析再考

Reconsidering the meaning analysis of the verb “kireru”

馬場典子

Noriko BABA

要 旨

本稿では、拙論（2009）で分析した動詞「きれる」に「痕跡的認知」という新たな知見を加え再考察した。拙論では「結果の状態」を中心に意味記述してきた。しかし本稿では、新たに先行研究を援用し、認知主体の背景知識と見えざる動作主による動作を推測することで、「きれる」のより詳細な記述をすることができた。「きれる」の中心的意味（基本義）は、「本来線状をなすものが何らかの原因により1点で2つの部分に分離する」ことである（事態1「分離」）。これを典型的ケースとしてその他に「本来面状のものが1本の線で2つの部分に分離する」、「本来線状をなすものがある1点で消滅する」という非典型的なケースもある。「本来線状をなすものがある1点で消滅する」というケースでは、基本義で背景化されていた「機能喪失」の側面も焦点領域に入ってきている。この「機能喪失」の側面がさらに焦点化されたのが別義②の「尽滅」（事態2）である。ここには「焦点移動」のメトニミーが関わっている。また別義③の「怒りの表現」としての「きれる」は、基本義からのメトニミー（焦点移動）およびメタファー（抽象化）に加えて、原因から結果へのメトニミーという複合的な要因からなる拡張であると言える。

キーワード

認知言語学, 痕跡的認知, 捉え方, メタファー, メトニミー, 分離, 尽滅

目次

- | | |
|-----------------------------|---------------------------------------|
| 1. はじめに | 3. 分析 |
| 2. 「きれる」再考の前に | 3.1. 国広（1985）の「痕跡的認知」、陳（2015）の「痕跡的認知」 |
| 2.1. 「きれる」の考察範囲について | 3.2. 「きれる」再考 |
| 2.2. 諸概念の確認 | 4. まとめ |
| 2.2.1. 比喩の下位分類「メタファー・メトニミー」 | |
| 2.2.2. 基本義の認定について | |

1. はじめに

拙論(2009)では動詞「きれる」の意味分析を行った。動詞「きれる」は、現行辞書においては相当数の多義的別義(以下「別義」)を認定されている多義語である¹⁾が、それらの別義相互の関係については十分に明らかにされてこなかった。また管見の限りでは先行研究では国広(1997)及び森田(1989)に「切る」との関連から「切れる」について若干の言及があるのみでさらなる分析の余地があると思われ分析を行った²⁾。さらに「きれる」は、近年怒りの表現³⁾として定着しつつあることから、拙論(2009)では、この「きれる」の新しい用法も考察範囲に含めて共時的に「きれる」の意味分析を行った。「きれる」には「分離」(事態1)と「尽滅」(事態2)という2つの事態が認められ、この2つは比喻による意味の転用として理解されている。しかし一見かなり違うこの2つの事態が、なぜ同じ「きれる」という動詞で理解可能になっているのだろうか。本稿では、拙論(2009)の考察に加え、認知主体の「背景知識に基づく捉え方」に焦点をあてて「きれる」を再考察する。

2.2. 諸概念の確認

2.2.1. 比喻の下位分類「メタファー・メトニミー」

「メタファー」は靑山(2002:65)によって、下のように定義されている。

メタファー：二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喻。(下線は引用者)

靑山はメタファーの例として「正月休みに食べ過ぎて、ブタになってしまった(p. 65,

例文5, 下線は原文のまま)」を挙げている。これはブタの太っている体型と、例文5の人の体型の「類似性」に基づき、ブタで「太った人間」を表している。またそのほかの例として、「目玉焼き」(卵料理の全体的な形が人間などの目に類似している)などが挙げられている。次に「メトニミー」について靑山(2002:76)は以下のように定義している。

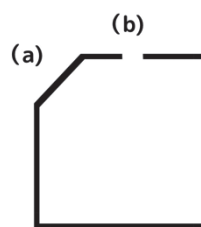
メトニミー：二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喻。(下線は引用者)

メトニミーにおいて重要なのは、「隣接性」と「関連性」である。「隣接性」を表す例としては、「一升瓶を飲み干す」「鍋の季節がやって来た」などがある。これはそれぞれ「一升瓶」や「鍋」に隣接する「(一升瓶に入った)酒」「(鍋の中の)料理」を表している。また「関連性」について靑山(2002:79)は「Aさんは本当に酒が好きだ(例32)」「やっとレポートが終わった(例文33)」を例として挙げている。また「レポート」とは「レポートを書くこと」を表している。つまり、それぞれの「もの」を表す言語形式で、「ものに関わること(酒を飲むという「行為」、レポートを書くという「行為」)」を表している。

2.2.2. 基本義の認定について

本稿では多義語である「きれる」を包括的に記述するために「基本義(プロトタイプ的意味)」を認定し分析を進める。よって本稿では靑山(2002:107)、靑山・深田(2003:142)にしたがい、以下のような要件を満たしている語義を基本義と認定する。

基本義：複数の意味の中で最も基本的なもののことであり、基本的であるということは、最も確立されていて、中立的なコンテキストの中で最も想起されやすいといった特徴を有する語義。（舩山（2002：107）、舩山・深田（2003：142）より引用者が一部改変）



【図1】

では次節から分析に入る。

3. 分析

3.1. 国広（1985）の「痕跡的認知」、陳（2015）の「痕跡的認知」

拙論（2009）では、「きれる」には大別して2つの事態が関わっているとし、分析を進めた。2つの事態とは「分離」と「尽滅」（尽きてなくなること）である。そしてこれら2つの事態を表す意味（別義）が複数あり、その意味関係は拡張によって生じていた。また2つの事態を表す意味は峻別できるものではなく連続性がある。しかし、この一見かなり異なる2つの事態が、なぜ同じ動詞で理解可能なのだろうか。

それには、意味の転用の他に「きれる」を理解する認知主体の「背景知識に基づく捉え方」が関与していると考えられる。

本稿ではその理論的支えとして、国広（1985）の「痕跡的認知」、国広の考えをさらに発展させた陳（2015）を援用する。

「痕跡的認知」の概念を提唱したのは国広（1985）である。痕跡的認知とは、認知主体がある対象を見た時、その対象をそのまま捉えるのではなく、その背後に我々が容易に想起できる対象が先に想起され、眼前にある対象は、それがあたかもある行為（または動作）によって引き起こされた状態の結果として捉えられているというものである。国広（1985）が挙げた図を一部改変したものを以下に示す⁴⁾。

国広は【図1】のような形を見たとき、最初に認知されることは正方形の各部分が変形した結果のものであるということであろうと述べている。国広はこの「結果の状態」を「痕跡的認知」としているが、陳（2015）の注目すべきは、それを「虚構の変化」とし、国広の例のような「虚構の変化」に限定したものではなく、「実際に動作があったとしても、なかったとしても、ある対象の持続的な状態だけを見て、それを引き起こした動作を推測するのが痕跡的認知である」としている点である（陳（2015：165））。そして以下の例を挙げている。

「財布が落ちている」という表現が表しているのは、本質的には財布が床の上にある、という状態でしかない。しかし、我々は、通常財布というものは床の上にあるものではなく、誰かのポケットやバッグの中にある、という知識がある。そのような背景知識により、財布が誰かのポケットなどから「落ちた」ものだと推論し、「財布が落ちている」というような表現を用いるのである。この場合、財布は実際に誰かのポケットなどから落ちた場合もあるし、他の原因によって床の上に位置するようになった可能性もあるが、いずれにしても何かの動作がなければ財布が床の上に位置するという状態にはならない。（pp. 164-165）

本稿も、陳の主張を援用したい。それは、ある対象の持続的な状態を見て、その状態に至ったのはある背景知識によって「見えざる動作主」の介入があったからだと推測できるからである。これを国広（1985）を改変した【図1】で説明してみよう。【図1】(a)は次のように表現される。

(a)かどが落ちている。

かどが欠けている。

かどが取れている。

これはいずれも最初からかどがあったという想定のもとに行われている。そのかどが「落ちた・かけた・取れた」結果がそこに残っていると見ている（国広（1985：13）下線は引用者）。

国広の結果の状態を焦点化しているのに対し、陳はその見えていない部分のプロセスも含めて焦点化している点は注目に値する。(a)の例を陳の考えに即して考えると、「(例えばこの図が紙でできていると仮定した場合)かどはもともとあり、四角形なのだが、そのかどを誰かが鋭利なもの（ナイフ・ハサミなど）で⁵⁾落とした・欠けさせた・取った」と推測され、(a)はその結果の状態であると説明できる。また(b)では

(b)線が切れている。

となっており、国広は「これも最初に切れ目のない直線があったという想定のもとになされた表現である」としている。これも陳に即して考えると「(例えばこの線は鉛筆やインクなどで描かれていると仮定した場合)切れ目のない直線が描かれており、それを誰かが消せる媒体（消しゴム・修正インク）などで消した結果の状態」ということになる。

また(a)に関しては「かどが切れている」という表現も不可能ではない。以下の例を見てみよう。

- (1)紙幣が破れたとしても、破損の程度によってはそのまま使用できます。一般的に言われているポイントをあげれば次のとおりです。【使える例】紙幣の端から数ミリ程度破れたり切れたりしているが、模様やホログラムなど偽造防止技術が搭載された部分に関しては破損がない。(https://www.tokiwa-ss.co.jp/journal/knowledge-of-money/money-torn.html (下線は引用者))

陳の考え方によれば、分離を表す「あるモノがきれる（きれている）」という状態は、もともと「一本の線または面状のものが何の損傷もなく存在する」という背景知識があり、それを見て「何らかの要因が加わった」と推測するのが「痕跡的認知」だとする⁶⁾。例えば「ロープがきれる」という表現には、「ロープが分断されるような重力がかかった、または動作主がいてハサミのような鋭利なもので分断した」という動作が推測される。また、「雲がきれた」という場合にも、具体的な動作主でなくても自然界の要因（空気の温度が上がる、高気圧におおわれ下向きの風が吹く、など⁷⁾）が関与すると考える。

3.2. 「きれる」再考

ここからは前節で紹介した陳の「痕跡的認知」の概念を、拙論（2009）の「きれる」の分析に照らして再考察する。

別義①（基本義）：（典型例として）本来一続きの線状をなすものが、何らかの原因によって2つに分離する。（非典型例として）本来

面状をなすものが何らかの原因によって1本の線で2つの部分に分離する。または本来線状をなすものが何らかの原因によってある一点で消滅する。（事態1「分離」）

基本義は、典型的には、「線状をなすものが1点で2つの部分に分離すること」⁸⁾である。そして国広（1997）は「その分離の原因は問題となっていない」（cf. 国広（P.64））としている。しかし上で見たような陳の「痕跡的認知」の考えに従えば、結果の状態を見て、何らかの動作主が引き起こした動作を推測するのであるから、この場合、原因となるものを推測することは必要である。よって「全く問題にならない」訳ではない。

典型例の「分離」の状態は、「本来は一続きであったという背景知識があり、それが何らかの原因によって2つに分離することを指して「きれる」と表現する」ことになる。

この「分離」には線状以外の様々なケースがある。まず、「面状のものが1本の線で2つの部分に分離すること」があり、次に「線状をなすものがある1点で消滅する」場合がある。この最後のケースは後述する「事態2「尽滅」」により近いと考えられる。

さらに、具体から抽象へのメタファーとして、目に見えないものを線状の物体に見立てて「きれる」を適用するケースがある。これは①'として本節の最後に扱う。

まず最初に、典型例である「線状をなすものが1点で2つの部分に分離する」場合を見てみよう。なお、以下に挙げる事例中の下線部は全て引用者によるものである。

(2)誰でも下駄の鼻緒が切れるとハッと思う。(YUMENO2/dark_minister.txt)

(3)十日目、ちょうど地蔵盆(じぞうぼん)で、路地にも盆踊りがあり、無理に引っぱり出されて、単調な曲を繰(く)

りかえし繰りかえし、それでも時々調子に変化をもたせて弾いていると、(中略)途端に三味線の糸が切れて撥ねた。

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/odasaku/files/meotozenzai.html>)

(4)その紙鳶はよくよく私に縁が無かったとみえて、あくる年の正月二日に初めてそれを揚げに出ると、たちまちに糸が切れて飛んでしまった。

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/kidou/htmlfiles/kidoumukashigatari.html>)

(5)「ロープが切れて、みんな崖(がけ)の中段のところ、おきざりになってしまったんだそうだ。」

(<http://www/Aozora.gr.jp/cards/Unno/htmlfiles/kyoryuto.html>)

例が示すように、「きれる」は「鼻緒・糸・ロープ」といった、本来線状をなす一続きのものが、その一続きの状態を維持することが不可能になる様な原因((2)の場合、人の足指にかかる力や重力、(3)はバチで三味線を強く弾いたこと、(4)は強風)によって分離することを表している⁹⁾。また分離箇所についてもそれが何カ所であるのかは明示されていないが、上記の例は「一箇所(一点)」と理解するのが自然であり¹⁰⁾、分離箇所は「点」であると考えられる。また上の例からもわかるように、二つの部分に分離されることによって、もともと持っていた機能が失われる可能性が高い。このように、「きれる」の基本義において「機能喪失」の側面が背景に含まれているということをここで指摘しておく必要がある。これは後述する「事態2「尽滅」」のところで「痕跡的認知」とともに再度触れる。

次に非典型的な例を見てゆく。まず「面状のものが1本の線で2つの部分に分離する」

ものを以下に挙げる¹¹⁾。

- (6)赤いシャツの袖が、ざっくりと切れていた。いや、白いシャツの袖が切れ、それが赤く染まっていたのだ。当然、袖の中も切れている。

(<http://www5d.biglobe.ne.jp/~sora-doh/gogokoi1.htm>)

- (7)「黙れっ!」そう怒鳴ると、ジェフがいきなりアルに殴りかかってくる。なぜジェフが突然、興奮したのか、アルには不可解だ。1発目のパンチはかわしたが、2発目を避け損なって、アルの唇が切れた。

(http://kti.arcsy.co.jp/dh_i/eoc/i0616/eoi06_03.htm)

- (8)オフセット印刷機では、印刷紙が高速で流れており、印刷を終わり乾燥工程を経た紙はかなりの温度に達しています。このため縮みや帯電を起しやすく、時には紙が切れて印刷を中断してセットし直さなければならないなど、さまざまな問題を引き起こしていました¹²⁾。

(<http://www.fuoseiki.co.jp/products/siyourei/printroll.html>)

これらの例の分離する前の一続きのもの形態は、「線状」ではなく「紙・袖・腕・唇」の様な「面状」であり、分離箇所は「点」ではなく「線」である¹³⁾。

ここで特筆したいのが、これらの例は「裂ける」または「破れる」のような動詞でも十分に表しうるということである。つまり「きれる」という動詞がなくても表現上大きな困難がないということになる。先に「きれる」の基本義の典型例は「本来一続きの線状をなすものが何らかの原因によって2つの部分に分離する」ことであると述べたが、何故面状

をしたものの分離が典型例には当たらないのかの理由がここにある。「鼻緒・糸・ロープ」といった本来一続きの線状をなすものが分離することを「きれる」以外の言葉で表現することは困難であるが、本来面状をなすものの分離は「裂ける」「破れる」の様な動詞で言い換えが可能である。つまり他の表現という選択肢がある分、「きれる」で表現しなければならぬという必然性は低くなり、従って典型性も落ちるからである。

次に「きれる」が「本来一続きの線状をなすものが何らかの原因によってある1点で消滅する」という事態を表すケースを見てみよう。

- (9)垣根が切れて左に曲がるといきなり銀閣。唐突に現れるもんだから心の準備が出来てなくて「え?これが(?_?)」状態。

(http://www.azug.gr.jp/~nirvana/journey/199807_1.htm)

上記の例は「垣根」が、ある地点で終わりになり、その後はなくなっていることを示している。垣根は敷地を限るために設ける囲いや仕切りであり、通常竹や植木などで作られており、隣の敷地とのいわば境界線のようなものである。よって垣根には「本来一続きで長く続いているもの」という背景知識がある。それが何らかの理由によって、垣根がそれ以上先はないことを「きれる」で表現しているのである。

次に挙げる例は、同じ表現が「本来面状をなすものが何らかの原因によって1点で2つの部分に分離すること」と「本来面状をなすものが何らかの原因によってある1点で消滅する」との二通りに解釈されるケースである。

(10)十国峠から見た富士だけは、高かつた。あれは、よかつた。はじめ、雲のために、いただきが見えず、私は、その裾の勾配から判断して、たぶん、あそこあたりが、いただきであらうと、雲の一点にしるしをつけて、そのうちに、雲が切れて、見ると、ちがった。私が、あらかじめ印（しるし）をつけて置いたところより、その倍も高いところに、青い頂きが、すつと見え

た。
(<http://www.aozora.gr.jp/cards/dazai/htmlfiles/hugaku.html>)

(11)スコールが通りぬけたらしく、急に雨が小降（こぶ）りになったと思うと、もう雲が切れて、もうもうと立ちのぼる水蒸気に、明るく陽の光がさしこんで来た。気温は、またぐんぐんとのぼり出した。視界がひらけた。

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/unno/htmlfiles/kyoryuto.html>)

(10)も(11)も共に「雲」が「きれる」例だが、それぞれ意味合いが若干異なっていると思われる。まず、(10)だが、これは富士山の頂きにかかっている雲が続いており、「雲が切れる」とは、その雲に「切れ間（すなわち分離箇所）」ができたと解釈できる。つまり「本来面状をなすものが何らかの原因によって2つの部分に分離する」というケースである。これに対し(11)の「雲」はスコールによって一時的に出現した雲であり、ここで「きれる」は「雲がある時点である状態から無い状態へ変化すること」を表していると考えられる。よってこれは「本来一続きの面状をなすものであるはずのものが何らかの原因によってある1点で消滅する」ことを表す「きれる」の例である。また、消滅するということは「痕

跡的認知」の考えに従えば、「本来あった雲が温度の上昇や太陽光によって「雲がきれた」という場合にも、具体的な動作主でなくても自然界の要因（空気の温度が上がる、高気圧におおわれ下向きの風が吹く、など）が関与すると考える。

以上に見てきた例は、「鼻緒・糸・ロープ」を典型例とする具体物、つまり線状の物体が「分離」の対象物となっていた。次では目に見えないものを線状の物体と見立てて「きれる」を適用するケースを見てみたい。

別義①'：（別義①からのメタファー）本来一続きにつながっている目に見えないものがある時点で消滅する。

(12)おっかさんが向こう側から、しきりに昨夜の礼を述べる。お忙しいところをなどと言う。三四郎は、いいえ、どうせ遊んでいますからと言う。二人が話をしているあいだ、よし子は黙っていた二人の話が切れた時、突然、「ゆうべの轢死を御覧になって」と聞いた。

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/souseki/htmlfiles/sanshiro/sanshiro02.html>)

(13)「……そうまでして、俺に何の用だ」「お前に話があるんだよ、八神」言葉が切れたとたんに、今までの表情が一転した。現れたのは暗い瞳。

(<http://ww2.et.tiki.ne.jp/~seed1990/red2.html>)

(12)(13)の例は、時間軸に沿って続いてきた話や言葉が終わりになる、つまりその後はなくなること示している。次に挙げるのは、より抽象化が進んだ例である。

(14)時光選手は、倉敷市浅原の倉敷守安ジ

ムで会見した。01年11月のタイトル戦に触れ、「あの時点が最高の力だった。緊張感が切れた感じ。迷う気持ちはない」と淡々と語った。

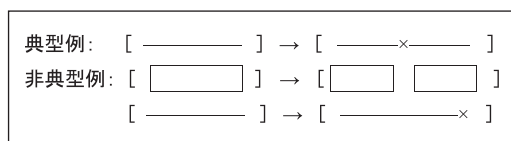
(<http://mytown.asahi.com/okayama/news02.asp?kiji=1901>)

- (15)「しかし八(やつ)ッで宅へ帰ったにしたところで復籍するまでは多少往来もしていたんだから仕方がないさ。全く縁が切れたという訳でもないんだからね」

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/souseki/htmlfiles/michikusa.html>)

(14)(15)は「緊張感」「縁」¹⁴⁾という一続きの状態が、線状の物体と見なされ、それが終わることを「きれる」で表している。

以上に見てきたのが、「きれる」の基本義である。これを図示すれば次のようになる。



【図2】「きれる」の基本義(分離)

目に見えないものへのメタファーの例は、図式化すれば具体物のケースと同じになるので、図の上では省略する。

今度は別義②を取り上げる。「きれる」の別義②は「尽滅」という事態を表す。

別義②: (別義①からのメトニミー) 備蓄されていたものが使われることによりゼロになる。(事態2「尽滅」)

次にその実例を挙げる。

- (16)1月末、定時制高校など県立学校18校と、市町村の一部の学校に食材を提供

する県学校給食会が、雪印製品の使用中止を決めた。富山市学校給食会も、雪印乳業のチーズの在庫が切れる3月から、雪印製品をやめる。

(<http://mytown.asahi.com/toyama/news02.asp?c=12&kiji=229>)

- (17)このあいだまで三越の地下食には味噌屋があったんだけど、買い置きの味噌が切れ、買いにいったら忽然と姿を消していた。仙台味噌のいいものが樽で売っていただけにすごく残念だった。
(www.space.lan.ne.jp/~akke28/sasaki/0203/0315.htm)

- (18)同支部(引用者注:日本心臓ペースメーカー友の会県支部)は95年10月、東海3県で初めて設立された。会員は157人。電池が切れる不安や携帯電話によるトラブルなど生活に必要な情報の交換や懇親をはかっている。心臓ペースメーカーの装着者は県内に約2千人いると推定されている。

(<http://mytown.asahi.com/mie/news02.asp?c=3&kiji=16429>)

別義②は「きれる」が表すもう一つの事態である「尽滅」(尽きてなくなる)である。(16)~(18)は「在庫・味噌・電池」などの備蓄物が本来「有る」状態であったのが、ある時点において「無い」状態に変化することを示して「きれる」で表現している。

では、ここで改めて、陳(2015)に即して、「分離」と「尽滅」の2つの事態がなぜ同じ「きれる」という動詞で理解可能なのかを考えてみよう。「きれる」にはその前提として「あるものが問題なく存在する状態」という背景知識がある。それが見えざる動作主によって分断されたり、使われたりしてなくなった結果の状態が「きれる」だということ

ができる。分離は分断されることによって、また尽滅は使われてなくなることによって、「本来持っていた機能を喪失する」ことを含意する。

また拙論（2009）で述べたように、「尽滅」と「分離」には重なる部分がある。基本義は「一続きのものが分離する」ことによって（「鼻緒」で考えてみると）「鼻緒である部分と鼻緒でない部分ができる」と考えることができる。そして別義②では「ある備蓄物が有る状態と無い状態になる」のであるから、両者の間には、「無の状態ができる」という共通項が確認できる。その違いは、「分離」においては含意にすぎないこの共通部分が、「尽滅」においては焦点化されているという点にある。よって「尽滅」は「分離」からの焦点移動によるメトニミー的拡張と考えられる。また基本義および①で示した「垣根・雲・話・言葉」（この他に「道」も同様の例だと思われる）などの例は、この別義②との中間体にあたる事例だと思われる。なぜならこれらの例では、「線（面）状」のものがあつた箇所から消滅するが、「尽滅」では「線（面）状」という重要な要素が抜け落ちているからである。

さらにこの別義②は、基本義のベースに含まれていた「機能喪失」の側面が焦点化されたものとして考えることもできる。なぜなら「備蓄」は当該の物体が存在することで機能を果たすものであり、「尽滅」は「機能喪失」そのものと言えるからである。この意味での基本義（「分離」）と別義②（「尽滅」）との連続性を示すケースとして次のような例がある。

(19)工事による通行止めの内容を詳しく教えてください。；カーブミラーや標識がみづらい。；照明灯の電球が切れています…

(www.ktr.mlit.go.jp/michi/case.htm)

(20)一九五九年九月二十六日。三重県・長島町の南松ヶ島自治会長を務める加藤良雄さん（四九）は、この日を忘れられない。死者不明者五千人以上を出した伊勢湾台風が、町を襲った日だ。小学六年生だった加藤さんはその夜、集会所に避難していた。「堤防が切れた」。その声で、国道1号に架かる近くの伊勢大橋に走った。

(<http://mytown.asahi.com/tokushima/news02.asp?c=11&kiji=13>)

(19)の「電球が切れる」ことは、直接には、（通常繋がっているはずの）線状の物体であるフィラメントが切れた結果、その中を流れる電流も遮断されることを指している¹⁵⁾。しかし通常「電球がきれた（きれている）」という場合、人はフィラメントが切断されたのを確認して「電球がきれた」というのではなく、電気のつかない（通らない）電球を見てというのが普通である。つまり「電球がきれる」とは、「照らし明るくする」という電球が本来持っている機能を喪失することを表しているのである。また(20)の「堤防がきれる」も、直接には、線状をなすものがある地点で分離することを表している。しかしここで重要なのは、「堤防の分離」そのものよりもその「結果」である。「堤防」は、その内側に大量の水を堰き止めるという役割を担っている。この「水を堰き止める」という堤防の機能が失われ、大量の水が外にあふれ出るという事態をこの場合の「きれる」は表している。なぜなら「堤防がきれる」は、洪水を伴わない場合には適用されず、洪水による災害（水が溢れ出た結果）の場合に適用されるからである。

このように、(19)(20)は、「線状のもの分離」と「機能喪失」との両側面が等しく焦点化さ

れており、基本義と別義②の中間例と言える。

さらに別義②においても、具体から抽象へのメタファーが生じている。別義②が抽象化されたケースを別義②'として次に見ていく。

別義②'：(別義②からのメタファー) 備蓄されていた(有効であった)目に見えないものがなくなる(無効になる)。

以下に挙げる例は、「備蓄されている目に見えないもの」がある時点で「有る状態から無い状態になる」ことを指している。これは目に見えない「時間」を別義②の「備蓄されていたもの」という具体物に見立てて「きれる」を適用したものである。

(21)マイヤーズ議長はまた、テロ対策特別措置法に基づく自衛隊の米軍支援について「卓越した支援に感謝し、高く評価したい。日本の貢献を非常に重要に感じている」と述べ、5月19日で期限が切れる派遣期間の延長に期待感を示した。

(<http://www.asahi.com/politics/yuuji/K2002042901534.html>)

(22)意外にも、厚生年金や雇用保険の受給資格のある人が住居を失っていた。「年金の受給年齢に達する前に失業した」「失業が長引き雇用保険の給付期間が切れた」という人が少なくなかった。

(<http://mytown.asahi.com/ehime/news02.asp?c=5&kiji=134>)

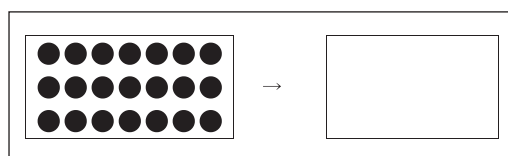
(23)その日、I君の就労ビザが切れた。「ビザ延長申請の書類は、すでに二ヵ月前に出していました。それが昨日、ビザが切れる前日になって書類に不備があるから延長はできないと入管から言ってきたんですよ」

(<http://www.asahi.com/column/aic/Wed/>

[medical.html](http://www.asahi.com/column/aic/Wed/medical.html))

(21)~(23)の「期限・期間・ビザ」の「きれる」はそれぞれ「派遣するという行動を起こすことができる時間」、「雇用保険がもらえる時間」、「ビザが使える時間」がある時点まではあったが、その時点を境になくなることを表している例である。このように別義②では、単に「有る状態から無い状態になる」ことを示していたが、ここでの別義は「有効な時間がなくなった結果それぞれの特約が無効になる」、「備蓄されていた電気を使い果たすことによって、電池が本来持っている機能が消滅する」という結果をより意識させる用法である様に思われる。

別義②を図式化すると以下のようになる。



【図3】「きれる」の別義② (尽滅)

ここでも目に見えないケースは図式化を省略する。図としては同じだからである。

さて、すでに冒頭で述べたように、「きれる」には「怒りの表現」としての新しい用法がある。これを別義③として以下に見ていく。

別義③：(別義①からのメトニミー (焦点移動)・メタファー (抽象化)・メトニミー (原因—結果)) (それまで保たれていた) 心理的な抑制力が、あるとき (またはあるできごとがきっかけで) なくなることにより怒りが表出する。

(24)注意されてカッとなった。先生とやり合っているときは、キレたので覚えていない」と言います。このように、少

しの中で、衝動的になり、「キレる」子ども達は珍しくなくなってきたように思われます。

(www.angel.nw.kp/~kenhome/ken/kodomol.htm)

(25)ソフトウェアの発達が未熟であるから。頭にきた時に感情をコントロールできないからキレるし、計画的な思考ができないからキレた時に相手を簡単に傷つけてしまうのです。

(www5a.biglobe.ne.jp/~miura-dc/ohanasi/kireru/kireru.html)

怒りが極度に強まると、心理的抑制力がなくなり、もはや制御できなくなってしまう。これが(24)(25)の「きれる」である。

この「怒り」の表現としての「きれる」がどのように心理的に動機づけられているかは、次のように考えられる。先に見たように、「線状をなすものが1点で2つの部分に分離する」という基本義から「機能喪失」の焦点化によって「堤防」のケースが生じている¹⁶⁾。

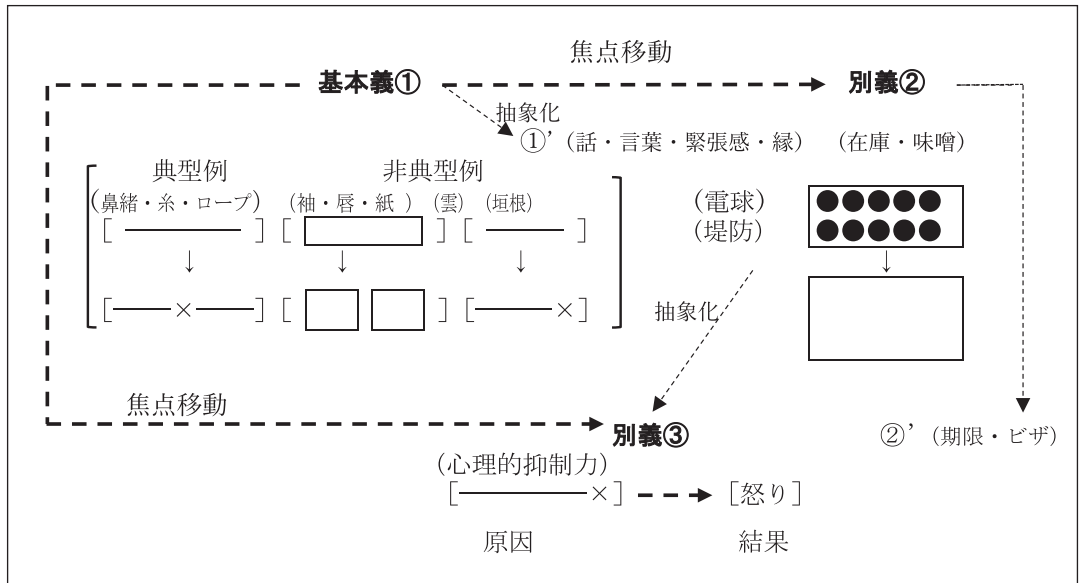
ここではこの目に見える「堤防」が、心理的抑制力という目に見えないものへとメタファー的に拡張されている。しかし怒りの表現としては、心理的抑制力がきれるという原因よりもむしろ結果の状態である怒りが中心に置かれている。ここで働いているのは原因から結果のメトニミーである。よって別義③は基本義からのメトニミー（焦点移動）およびメタファー（抽象化）に加えて、原因から結果へのメトニミーという複合的な要因となる拡張であると言える。

以上の分析の流れを以下に図示する（-----▶はメトニミー，-----▶はメタファーをそれぞれ表す）。

尚、この図式では、それぞれの別義からの目に見えないものへのメタファー（別義①'および別義②'）は省略してある。図としては共通だからである。

4. まとめ

本稿では、拙論（2009）に「痕跡的認知」という新たな知見を加えることで、「きれる」



【図4】「きれる」の多義構造

を再考察した。拙論ではどちらかというところ「結果の状態」を中心に意味記述してきた。しかし本稿では国広（1985）、陳（2015）を援用し、認知主体の背景知識と見えざる動作主による動作を推測することで、「きれる」のより詳細な記述ができたと考えている。「きれる」の中心的意味（基本義）は、「本来線状をなすものが何らかの原因により1点で2つの部分に分離する」ことである。これを典型的ケースとしてその他に「本来面状のものが1本の線で2つの部分に分離する」、「本来線状をなすものがある1点で消滅する」という非典型的なケースもある。「本来線状をなすものがある1点で消滅する」というケースでは、基本義で背景化されていた「機能喪失」の側面も焦点領域に入ってきている。この「機能喪失」の側面がさらに焦点化されたのが別義②の「尽滅」である。ここには「焦点移動」のメトニミーが関わっている。また別義③の「怒りの表現」としての「きれる」は、基本義からのメトニミー（焦点移動）およびメタファー（抽象化）に加えて、原因から結果へのメトニミーという複合的な要因からなる拡張であると言える。

注

- 1) 『大辞泉（第二版）』等。
- 2) 「きれる」の意味は、「きる」との対比によってより明らかになるという指摘もあるが、筆者の研究テーマは「怒りを表す動詞の意味分析」である。拙論（2009）では「きれる」が怒りの表現として理解されるには、どのような動機付けが関与しているのか探るのが目的であり、本稿ではさらに新しい知見を取り入れ、「きれる」を再考察するのが目的である。よって本稿でも動詞「きる」との対比は行わない。
- 3) 「キレる」という表記が多く用いられる。
- 4) 国広の図は、他に突き出た箇所、外側に丸く膨らんだ箇所などがある。本稿の図1は本稿の

説明に必要な部分のみを取り出したものである。

- 5) この「誰かが鋭利なもので」という表現はかなり断定的な表現のように思われるかもしれない。しかし、これが例えば「自然界の要因」であったなら、このように鋭利ななどは生まれまいだろう。また鋭利ななどでなく別の形で欠損しているのであれば、「破れた・ちぎれた」などの別の表現を用いるであろう。このように、欠損したと思われる形一つをとっても、それがどのように生まれたのかを推測するとき、我々の背景知識が必要となってくるのである。
- 6) 陳は、主語不一致型複合動詞には2つのタイプがあり、それぞれ異なる認知的動機づけによって形成されたと考えている。そのうちの一つ「突き出る」は痕跡的認知に基づくとしている。本稿では陳の考察内容の詳しい検討は対象外であるが、陳が示した「痕跡的認知による自動詞化された複合動詞の例」として、「売り切れる」が挙げられている。「売り切れる」（売べきものがなくなる）は本稿での「事態2「尽滅」」に関係ある動詞である。この点については本文で述べる。
- 7) 子どもの科学のWEBサイトを参照 (<https://www.kodomonokagaku.com/read/hatena/5046/>)
- 8) 国広（1997：64）は動詞「切る」の基本義について、現行辞書ではどれも＜刃物などを使って一続きのものを分離させる＞とされている点を改め、《線状の物を一点で分離させたり、面状の物の一部を線的に分離させたり、立体を滑らかな断面ができるように分断することを指すが、手段に制約はない》（下線は引用者による）としている。本稿の分析対象である「きれる」であるが、動詞の自他という関係性から意味も類似している点が多い。本稿での基本義は国広の以上の記述に負うものであるが、下線の「手段に制約はない」という点については注釈が必要であろう。すでに見た本文中の図1の(a)は、何かしら鋭利なもの（ナイフ・ハサミなど）で分断しているからこそ、「切れている」と表現できた。つまり、手段にある程度の制約はあるということになる。「切る」もこれと同様だと思われる。
- 9) 「糸が自然にきれた」と言うことも可能であるが、この場合も例えば「長い時間の経過によって/糸の弱い部分に力がかかって（きれた）」

- 等、何らかの原因が背景に存在すると思われる。
- 10) 本文の例の様な「鼻緒・糸・ロープ」の分離箇所が複数であることを示すには、通常「ぶつぶつときれる」「あちこちできれる」等の様に、分離が複数で起こったことを表す表現が必要とされる。
- 11) 分離するものの例として挙げた「紙・袖・腕・唇」の中でも、さらに「紙・袖」は「裂ける」「破れる」と自然に共起できる。しかし「腕・唇」の場合、「裂ける」と共起は可能だが、「きれる」とはかなり事態が異なる。これは「唇・腕」などが人体の一部であり、面であると同時に厚みをもった人体の組織であることと関係があると思われる。つまり「唇がきれた」では表層（皮）の分離（比較的軽い損傷）を表すが「裂ける」はさらに組織内部への損傷を表す。このように人体における「きれる」と「裂ける」では程度が明らかに異なるため、単に面を表す「紙・袖」とは全く同じではないことに注意されたい。
- 12) この場合の「紙が切れる」は、一見、後述する「事態2「尽滅」」（備蓄してあったものが使われることによりなくなるの意）に近いと思われるが、前の文脈より、「紙が縮んだり帯電を起ししやすい」という紙の性質やその状態の説明であることがわかる。このことからこの例文は「分離」の例文として相応である。
- 13) 面状をしたものの分離には以下に示す様な「ひび・あかぎれ」もある（国広（1997：64）は「切れる」について、「手に「あかぎれ」が「切れる」は場合は道具は何も使われていないし、分離箇所は線状をなしている。」（下線は引用者による）と述べている）。

(i)でも、今年は、その苦しみから、開放されました。「家族みんなのクリーム」を使ったら今年の冬は、ひびが切れませんし、毎日の、軽石擦りも必要なくなりました。

(<http://www6.ocn.ne.jp/~asi2525/syourei1.html>)

(ii)足の裏がひどくほてるので、立ちどまって調べてみると、草鞋の底はすり切れて大きな穴があいていた。足はところどころあかぎれが切れ、ところどころ豆ができていた。

(<http://hiroshima.cool.ne.jp/ogaman/>

kojisinpen/hikou.html)

- 「ひび・あかぎれ」は皮膚がきれた結果としてできたものであり、それが「ガ格」で表されている。よって本文の例(6)~(8)とはガ格名詞の性質が異なると思われ、別義の可能性もあるが、現時点ではそれを十分に説明することができない。よってこの点に関しては今後の課題とする。
- 14) 慣用度は低いが、以下の例の様に、「縁」は人とのつながり以外の抽象的なつながりも表し得る。

(iii)自分はますますつまらなくなつた。とうとう死ぬ事に決心した。それである晩、あたりに人のいない時分、思い切って海の中へ飛び込んだ。ところが——自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなつた。

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/souseki/htmlfiles/yumejuya.html>)

(iv)「お手のすじさ。おいらが食い物屋と縁が切れたら冥土（めいど）へちけよ。あの向こうの突き当たりだ。オナラチャズケ、ウジリヨウリとひねった看板が見えるじゃねえか。あそこにいるから、舞っておいで」

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/mitsuzou/htmlfiles/yamagarabijin.html>)

- 15) ここでガラスの球体から、フィラメントへの「全体一部分」関係のメトニミーが生じている。「電球が切れた」というのは、「フィラメントが切断されていることにより電気がつかなくなった」という電球の機能喪失を意味していると本文では述べたが、それと同時にこの表現は外部から観察しやすい（あるいは一番目立つ）箇所をと捉えて表現していると言える。「電球が切れる」では、認知しやすい「ガラスの球体」を指して、内部のフィラメントという電流が通る部分を捉えていると言える。よって「フィラメントが切れた」という表現の場合、「電球が切れた」というより専門的で説明的な印象を受ける。
- 16) 怒りの表現としての「きれる」が「線」的なものであるという指摘は既に松本（1999）に見られる。松本（1999）は「きれる」を通時的に考察し、「きれる」が大阪の芸人の世界で理解され享受されたのは、もともと「センキレ（線切れ）」「キレテル（切れてる）」（「頭がおかし

い(人)」「狂っている(人)」を意味する)という大阪に古くからある楽屋ことばを大阪の芸人たちが熟知していたからである。」(pp. 142-143より引用者が要約)と述べている。但し「きれる」が怒りの表現となるためには、様々な要因が関わっており、特に本稿で示したように原因から結果へのメトニミーを見落とすことはできない。

参考文献

- 国広哲彌 (1985) 「認知と言語表現」『言語研究』88, 1-19. 日本言語学会.
- 国広哲彌 (1997) 『理想の国語辞典』東京：大修館書店.
- 陳奕廷 (2015) 「日本語複合動詞の自動詞化のメカニズムについて—プロファイルシフトと痕跡的認知の観点から—」『日本認知言語学会論文集』15: 158-170.
- 馬場典子 (2009) 「怒りを表す動詞(句)の意味分析」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻博士学位論文(未公刊)

- 松村 明編『大辞林』(第二版)東京：三省堂.
- 松本 修 (1999) 「キれる・ムカつく考—大阪の芸人がテレビで広めた言葉—」『日本語学』Vol. 18., No. 13. 139-148. 明治書院.
- 初山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』町田健(編)(シリーズ・日本語のしくみを探る⑤) 研究社.
- 初山洋介・深田智 (2003) 「意味の拡張」『認知意味論』松本曜(編)(シリーズ認知言語学入門第3巻 73-134, 大修館書店.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』東京：角川書店.

実例採集

- 名古屋大学に設置されている日本語コーパス「毎日新聞(1991~1999)」, 「青空文庫」
検索エンジンGoogle (URL: /<http://www.google.co.jp>)
及びアサヒコム (URL: /<http://www.asahi.com>)